依然として厳しい林業経営の動向

専任研究員　秋山孝臣

1　はじめに

農林水産省の「林業経営統計調査」によると、山林を20ha以上保有し家族経営により一定程度以上の施業を行っている優良森林所有者の場合、2008年度の年間林業粗収益は178万円で、そこから林業経営費を差し引いた林業所得は10万円であった。約９割が10ha未満の保有であるので、保有山林20ha以上の森林所有者と言えばかなり大規模である。この規模の森林所有者でも、現状では林業はほとんど所得を生んでいないと言っても過言ではないだろう。森林所有者の大半が林業以外で生計を立てている。

昨今の林業をめぐる話題では、森林経営計画等の政策の面から間伐に注目するものが多いが、ここでは林業によって収入を得、職業としての林業を成立させるためには不可欠であるという意味で、主伐を中心に林業経営の現状を概観し報告する。

2　素材価格・山元立木価格は長期的に下落傾向

原木市場での売買価格であるスギ・ヒノキの素材価格は1980年の39,600円/㎥、76,400円/㎥をピークに下落傾向にあり、近年はスギ12,000円/㎥、ヒノキ21,000円/㎥前後で推移している。極めて激しい下落である。

また、林地に立っている樹木の価格であり、森林所有者の手取り価格を表す山元立木価格は、2012年で、スギが2,600円/㎥、ヒノキが6,856円/㎥であり1980年のピーク時に比べてスギが11％、ヒノキが16％となっている。素材の生産費等はあまり下がっていないため、原木市場の価格である素材価格から生産費等を差し引いた山元立木価格は一層下落しており、森林所有者の手元に残る収入は激減しているのである。

3　育林経費を下回る主伐の立木販売収入

このような素材価格、山元立木価格の激しい下落により、森林をすべて伐採する主伐によっても、立木販売による収入では森林の再生産にかかる育林経費を賄うことができない状況にある。スギ人工林を、50年生で主伐した場合の立木販売収入は、2010年の丸太価格に基づいて試算すると117万円/haとなる。これに対して、植栽から50年生までの造林・保育にかかる経費は平均で231万円/haとなっている。このうち７割にあたる156万円/haが植栽から10年間に必要となっている。このため、森林所有者が主伐の立木販売により再造林を行うことは非常に困難となっている。

造林・保育にかかる経費のおよそ半分は補助金によって賄われていると言われているが、それでも231万円/haの半分の115万５千円/haが森林所有者の負担であり、この例で言うと、50年間の造林・保育で得た収益は前述の販売収入117万円/haに対しわずか１万５千円/haである。造林・保育と伐採(主伐)を繰り返すのが持続可能な林業経営であるが、これでは

職業としての林業は営めるはずもない。このため全国で主伐の後に植栽しない「伐(き)りっぱなし」の林地が増えており、環境面からも問題となっている。特に、長引く極度の林業の不採算性と後継者の不在から自分の代で林業をやめてしまおうと考えている高齢者が増えており、主伐後の造林をしない例が多くなっている。

4　低い主伐実施意欲

10年の農林水産省「林業経営に関する意向調査」によると、林家を対象として、今後５年間における主伐の実施に関する意向を聞いたところ、「主伐を実施する予定がある」と回答した森林所有者は23％、「主伐を実施する予定はない」は60％、「主伐できる山林はない」が16％となっており、主伐の実施に対する意欲が低いことがわかる。前述のとおり、木材価格が低いこと、主伐後の造林・保育経費が高いことが原因である。

行政は10年の森林・林業再生プランで今後国産材を増産し、2020年に木材の自給率を10年の26.0％から50％に引き上げ林業の活性化を図ることを謳(うた)っているが、国産材生産をめぐる現状では実現は厳しいと言わざるをえない。前述したように、林業の現況は、林業に対する意識のかなり高い林家でも木材価格の低迷を原因として主伐を避け、間伐を繰り返しながら森林の状況を辛うじて健全に保つよう努力し、言わば仕方なく伐採を先延ばしして長伐期林業を営んでいる状況だからである。主伐を考えない林業は経営とは言えず、相応の利益を上げながら持続可能な生産のサイクルを繰り返すと言う意味での林業の活性化は不可能である。

5　小規模林家の施業・経営意欲は低調

前述の「林業経営に関する意向調査」によると、今後５年間における「保育や間伐を含むすべての森林施業」の実施に関する質問に対しては、保有山林面積が「１ha以上20ha未満」の林家の69％が「実施が必要な山林はあるが実施する予定はない」と施業放棄する旨の回答をしており、同林家の77％が「山林は保有するが林業経営は行うつもりはない」と答えている。造林・保育、伐採を繰り返す従来からの持続的林業経営は不可能と諦めて、森林は消極的に保持するにとどめるとしているのである。現在、施業放棄林・荒廃林が広範に出現している原因である。

6　おわりに

現在、行政は12年度からの森林・林業再生プランの本格実施にともない、ドイツ林業に範を取った、効率化された近代的な林業を推進しようと様々な施策を展開している。森林組合においても、数十ha規模の面的施業の遂行を中心とした森林経営計画の実施に経営の重点を置いている。しかし、これらは主に間伐材の伐採・搬出を念頭においており、主伐の重要性に対する考慮に欠ける点がある。並み材の大量生産を図るこれからの林業においては、林業の地域ごとの活性化や木材価格の差別化等により、主伐できる木材価格を前提とした林業システムの構築が重要である。

（あきやま　たかおみ）